

外部評価実施報告書

項目別評価	評定
教育（人文社会科学部）	B
教育（社会文化システム研究科）	B
研究	B
組織・管理運営	B

評定は以下の4段階から選択願います。

- A 非常に優れている。
- B 優れている。
- C 相応である。
- D 不十分である。

令和2年3月15日

氏名：塚本純 (自署)

【優れている点】

○教育（人文社会学部）について

- ・地域社会の今日的な課題発見や解決に寄与するという目的に対応したディプロマポリシーを定め、人文科学や社会科学の専門教育をもとに体系的教育プログラムを編成している。カリキュラムマップで示されるような視覚化を図り、さらに内部検証により教育の質保証に努めている点は、評価できる。
- ・科学的分析力や実践力養成への対応は、他大学の例を見ても未だ発展途上であり、各大学独自の考え方で整理するしかない状況である。人文社会学部の取り組みも、新機軸として注目される。
- ・近年、科学的分析力や実践力養成は、全国どの大学でも重要視されてきているところである。実践的能力や汎用的能力を学部共通で養成する目的で、独立に科目区分（学部共通科目）を設け、「キャリア科目」「ジェネリックスキル科目」「実践科目」を全てのコースで必修としていることは注目される。
- ・少人数の授業を行いやすい利点を活かし、学生の主体的学修を保証することを目的に、アクティブラーニングを実施している。
- ・“学部共通の養成する資質”と“専門性の重視”的両者は、教養教育を含めて学部・コースの理念にしたがって適切なバランスの配置とすべきである。人文社会科学においては、ちょうど全国水準の中庸を意図している印象である。
- ・海外研修を必修とするプログラムを設置し、「異文化間コミュニケーション」受講生の増加、学部学生の派遣留学生者が増加している点は注目される。
- ・履修指導も、体系的に適切に行われている。

○教育（社会文化システム研究科）について

- ・人文社会科学系の大学院として、少人数の定員ではあるが継続的に定員を充足している。地方にある国立大学として、地域での学修機会の提供ができている。
- ・“大学の世界展開力強化事業”に採択されたプログラムに参加し、国際交流において実績を上げている。

○研究について

- ・地方にある中小規模の国立大学法人が研究面で存在感を示すことは困難が多い中で、特定の分野（ナスカ

地上絵、映画研究、山形映像文化等）を重点的に取り上げ強化していることは、現実的対応として評価できる。

- ・人文社会学部全体としての研究促進という観点からは、多様な分野教員の連携により地域創生に関する研究体制を取っていることは、社会貢献の推進という側面から評価できる。

○組織・管理運営について

- ・国立大学法人の管理運営において、法人部局長としてのキャンパス長と教学の責任者としての学部長を併置していることは、全学と学部との責任の所在を明確にする点において注目される。
- ・山形大学の教育の内部質保証は、以前から全国から注目を集めている。その結果と思われるが、人文社会学部のFD講演会、学生参加型のFDワークショップも時宜をとらえたテーマによって実施されている点は評価される。

【改善を要する点】

とくにありません

【助言、提言等】

○教育（人文社会学部）について

- ・科学的分析力や実践力養成への人文社会学部の取り組みが注目されるがゆえに、養成する能力に対応した科目内容の検証と改善は、科目区分や科目名称の変更を含めて柔軟に行われる方が良いかもしれない。
- ・具体的には、「ジェネリックスキル」の概念も、行動につながるコミュニケーション能力を含めた“実践力”と、あるいはそこに分析力も加わった（広範な）“汎用力”ととらえる考え方もある。これらの整理は、未だ正解のない未知の世界であり、他大学と同様に不断の努力として今後とも行わざるを得ないのであろう。
- ・“学部共通の養成する資質”と“専門性の重視”的適切なバランスが、ちょうど全国水準の中庸にある印象である点については、開始したばかりでもあります、今後の検証に期待したい。
- ・5コースには、既存の学問をベースとした学科と、養成する人材・資質をベースとしたコースが混在しているように感じられる（既存の多くの学部は前者であり、私が所属している学部は後者）。その二面性が、カリキュラムにも反映している印象である。これは、受験者の確保等の戦略として肯定的に理解できるが、学部評価者の視点からは、どのような資質を学部共通で養成するのかを含めて、学部としての見え方が注目されることは意識しておいた方が良いかもしれない。

○教育（社会文化システム研究科）について

- ・学部改組の延長線上で、今後、大学院に関しても教育課程の改革が行われると思われる所以、それに期待したい。そのときに、修士課程においても学際性を付加するのか、大学院においては専門性を重視するのか、判断が必要になるであろう。いずれにしても、明確なコンセプトを定めることが必要であろう。

○研究について

- ・研究成果は結果が明確に示されることから、最近、国立大学法人内で数値として示すことが求められている。人文社会学系分野では、必ずしも外部資金等の獲得を指標にする必要はないが、何らかの具体的な指標を示すことができればよい。【優れている点】であげた二点についても、成果の可視化は問題とされるであろう。同じ分野に属する者としてその難しさがよく分かるがゆえに、今後具体的な事例としてご教示いただければ幸いである。

○組織・管理運営について

- ・教育の内部質保証において評価できることはすでに述べたが、教員の教育力向上のための方策について、検討の成果がどのようなFD関連の取り組みにつながったのか示されるとなお良い。

(参考までに)

:以下二点は、報告書の記述方法に関わります。内部資料として扱い、公表の時には削ってください。

○教育（人文社会学部）について

- ・アクティブラーニングは、近年重視されてきた実践力を含めた汎用力を養成するための、学習指導法ととらえるのが一般的ではないだろうか。自己評価書 p.3~p.4 第二段落までの内容は、<教育課程の編成、授業科目の内容>に関わる部分が多いように思われる。報告書の書き方として、上記の内容を含めて養成する人材像に基づく<教育課程の編成、授業科目の内容>を再度整理し、アクティブラーニングなどの授業実施における特徴的取り組みを<授業形態、学習指導法>に記述すると、外部者には伝わりやすいのではないだろうか。
- ・p.5 <成績評価>後半に含まれている「履修指導」の内容については、項を分け<履修指導>の特徴としてアピールすることも考えられるのではないか。